
市民参加型調査「親子 de かめ GET」スタート

谷口真理・亀崎直樹

Project of the fresh water turtles researched by family.

By Mari Taniguchi and Naoki Kamezaki

人はそこに当たり前にあると思っている身近な自然の変化に対して、鈍感であるものです。例えば、私たちにとって当たり前川や池でみかけるカメは、いったいどんな種類で、どれくらいすんでいるのでしょうか。日本の本州、四国、九州にはニホンイシガメ(以下、イシガメ)、クサガメ、スッポン等が生息しているといわれていますが、近年、外来種ミシシッピアカミミガメ(以下、アカミミガメ)が侵入し、在来のカメを脅かしていると言われていいます。当たり前にみかけられていたイシガメが、最近みられなくなった。子ども頃、当たり前にみかけていたイシガメがいつの間にかアカミミガメになっていた。そんな経験はあるのではないのでしょうか？

実際、日本の河川や湖沼はもはや外来種アカミミガメだらけです。しかし、日本全域でどの程度の数のアカミミガメが侵入しているか、イシガメはどこに生き残っているのか、と言う素朴ですが基本的な情報は非常に少ないのです。そこで必要となってくること、そして私たちにできることは身近な自然のモニタリングです。

モニタリングとは、変化を記録にすることです。例えばどこその池に何年何月何日にイシガメがいた、ということを残すだけでも立派なモニタリングです。近所の川でカメを見かけたら、写真をとって記録するだけでも何年もすれば、変化を知るための重要な記録になるのです。しかし、現段階ではその情報を収集し、蓄積する体制は確立されておらず、ま

た、個人や一機関の力でそれを行うには限界があります。

そこで、神戸市立須磨海浜水族園では身近なカメたちの生息状況を調査していただける「親子調査員」を 2010 年 7 月より広く市民に募集しました。現在 20 組の親子が参加しており、約 80 箇所（河川や湖沼）における淡水カメの情報が寄せられています。親子調査員のように、そこに住む住民が身近な自然に目を向けて、調査を行う体制を整えば、広範囲で長期的なモニタリングを行うことができるのではと考えています。どんな断片的な情報でも、それを長期間にわたって集め、解析することで、淡水カメを中心とした日本の陸水の生態系の変化をモニタリングしていきたいと考えています。